

LIT

Faculty of Letters,
Kobe University 2022

文学部への好奇心をアップする情報紙

神戸大学文学部ホームページ

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/>



変わること、
変わらないこと

Change and Continuity

2020年4月、私は文学部・人文学研究科の留学生担当講師に着任した。言うまでもなく、日本で新型コロナウイルスの感染が本格的に拡大しはじめた時期である。予定されていた業務の多くは対面が前提だったから、それらをオンラインで再構築することが最初の課題となった。もちろん、対面で行うべきことをオンラインですべて代替できるわけではない。それでもなお、可能な限りのことをするにはどうすればよいか。そんな試行錯誤の日々が今に至るまで続いている。

たとえば私が担当する業務の一つとして、インターナショナルアワーの開催がある。これは月一回、留学生と日本人学生の交流を促進するために開催されるイベントだが、もちろんコロナ禍の状況では実際に集まることができず、Zoomを使ってオンラインで開催することになった。内容に関しても模索が続いたが、最近では「トークタイム」というイベントを中心に行っている。毎回一つのトピックを設定して、留学生と日本人学生にそれぞれ自国の文化を紹介してもらおうという内容だ。留学生側としては神戸

「間口の広い」文学部の授業



オックスフォード日本学プログラム (KOJSP) の9期生に発表をお願いしている。この原稿を書いている時点では、入国制限が続くなか、9期生は来日の機会を待ちながらオンラインで授業に参加するという状況にあるが、そのようななかでも入念な準備で発表をしてきている。中国、イギリスの食文化や、デンマークの「ヒュッゲ」の文化など、毎回プレゼンを通してそれぞれの文化の豊かさを改めて発見する。

授業に関して言えば、私は留学生と日本人学生の双方を対象に、日本の文化と社会をテーマとした授業を受け持っている。その一つはディスカッション中心であるため、当初はZoomによりリアルタイムで開催した。しかしやがて参加する留学生がオンラインでの「見なし留学」となり、時差の問題で実施が難しくなった。そこで講義を動画で配信し、それにもとづくディスカッションは基本的にSlack上のチャットで行うというやり方に切り替えた。これにより、時差と関係なくいつでも好きな時間に議論に参加してもらえるようになった。

この方式はわりあい好評で、「ディスカッションがおもしろい」という声を幾度か耳にした。たしかに留学生も日本人学生も毎回積極的に発言してくれているように思う。窮余の一策だったが、異なる国の学生が交流する上で、テキストベースのコミュニケーションは意外と有用だということがわかった。日本語と英語のどちらでコメントを書いてもよいのだが、慣れない言語であっても、テキストベースであれば落ち着いて読み書きできるのだろう。ソーシャルメディアを日常的に使う現代の学生は、テキストベースのコミュニケーションに慣れているという背景もあるのかもしれない。

ところで留学生たちの議論を見ていると、かつてのようなステレオタイプに基づ

く日本文化の理解が大きな力を持っていないことに気付かされる。グローバル化が進み、多様なメディアを通じて日々多くの情報が得られる現代の若者のあいだでは、ステレオタイプにとらわれない新たな視点が育ちつつあるのかもしれない。

とはいえもちろん、日本文化と他の文化との差異が存在しないわけではない。たとえばある留学生はディスカッションのなかで、日本人がしばしば「自己責任」を重視することに驚いたと言っていた。彼は、日本人は「集団主義的」だというステレオタイプに対する反例としてそのことを挙げたのだが、日本人における自己責任 (self-responsibility) の意識の強さは、ルース・ベネディクトが『菊と刀』(1946)のなかでつとに指摘している。このような文化的特徴を、ステレオタイプや単純な一般化に陥らずしていかに理解するか。そのことが現代においてもなお重要な課題であることに、私自身も気づかされた。研究の面においても、留学生や日本人学生との議論から学ぶことは多い。

様々な国の異なる文化を知ること、そして国の違いを超えて、お互いの考えや気持ちをやりとりすること。それはどちらも楽しい瞬間だ。そのこと自体はたとえオンラインであっても変わらない。もちろん、対面で過ごす時間の質は、オンラインとは比べべくもない。だが、今というこの機会は一度きりしかない。そのなかで学生たちがわずかで「何か」を得られることを願い、今日も試行錯誤は続く。

留学生担当講師
齋藤 公太

本誌には、文学部の授業は「少人数」だという記述が出てきますが、もう一つ、文学部の授業の特徴として、「主要科目に学年指定がない」ことを挙げたいと思います。文学部では、1年次に「文学入門」「人文学基礎」「人文学導入演習」などの基礎科目で土台を固めた後は、選択必修科目である「卒業論文関連科目」42単位を、2年生から4年生までの3年間かけて単位をそろえていくこととなります。その結果、例えば私が担当している科目だと、「国語学特殊講義」の教室に、2年生から4年生までが集まることとなります。そればかりか、この科目は大学院の「国語学特殊研究」と重ね合わせ科目になっているため、大学院生も混じります。科目等履修生が加わることもあります。このような運用を行っている学部もあり、例えば本学経済学部では、学年によって受けられる科目が決まっていたり、「履修前提科目」が指定されていたりします。2年次以上で履修できる「経済成長論」は、1年次の「中級ミクロ経済学」と2年次の「中級マクロ経済学」とが履修前提科目となっているのがその例であり、2年生に上がった人がいきなり「経済成長論」を履修することは想定されていません。土台を固めながら高い建物建てていくイメージだと思います。

◎今回 お話くださった先生
石山 裕慈 准教授 (国文学専修)



どころがあり、大学院生には大学院生に相応のものを吸収できる。どこからでも入れて、好きなところを好きなだけ味わうことができるのが、人文科学の醍醐味なのであって、「ここまでが、2年生で履修する」「論の内容」「ここからは、○○論の履修を前提にした××学の内容」のような細分化や範囲の設定は、文学部にはなじまないのだと思います。下から建物を作っていくイメージではなく、1年次に基礎を固めたら、あとは3年間、漆を重ね塗りするようにして学問を深めていく；そんな図式でしょうか。このしくみは、教員にとつてもある種の緊張感をもたらすものです。あらかじめ定められた範囲のない、国語学の広い範囲からテーマを切り出してきて、まとまった内容の講義を行う。しかも人の学生は何年か続けて国語学特殊講義を受講するわけですから、同じ内容を毎年扱うわけにはいきません。一人の学生が、ある程度バランスよく国語学の知識を得るためにはどういった内容を組み立てるのがよいか；そんなことを考えているうちに、教員の方にもしばしば新たな着想がもたらされます。大学教員の業務に「教育」と「研究」がありますが、両者が不可分であることをかみしめるのです。

先輩の足跡！ 学部時代の思い出、あれこれ



荒武 叶子
ARATAKE Kyoko
2020年3月卒業
株式会社オプテージ勤務

神戸大学文学部は巷で「あそぶんがくぶ」とも呼ばれているとか。言葉だけ聞くと、不真面目なの!? という印象を受けてしまいますよね (笑) しかし、そういう意味ではありません。文学部での学びは、遊びのように幅広く自由なのです。人間・人為に関わるものを学問に取り込んでしまいます。高校までの一斉授業のように、与えられる勉強ではなく、自分の興味のおもむくままに、“どんなことでもどこまでも”探求することができます。

例えば、私は地理学専修に所属し、卒業論文のテーマは六甲山における登山でした。同じ専修の同期生はというと、一人はトイレ、もう一人は将棋が研

究対象でした。見事に方向性の異なる三人ですが、よく研究室に集まっては、講義や本などの他愛もない話題で盛り上がりました。お互いの研究の進み具合に焦ることもしばしばで、良い意味でいつも刺激を受けていました。時には先生も交えたその雑談がコロコロ転がって、思わぬ研究のヒントに行き着くこともありました。

同じ専修の仲間でも感性はこれだけ違いますから、他の15専修の友人や教員陣となると、本当に多様な価値観を持っています。専門も趣味も十人十色。毎日の講義が、食堂での会話が、未知との遭遇です。仏像好きの友人に仏像の魅力をたっぷり1

時間、事細やかに語られたのも、大学生になって初めてでした。文学部には、何かに夢中になっている○○マニアがわんさかいます。その中で過ごすうちに、私も自然と研究に打ち込み、最終的には卒論を製本して図書館に納めるに至りました。学生の学びをしっかりサポートしてくれる教育体制もわかりですが、この周りの人たちがこそが最高の環境です。他では得られない出会いと物事を追求するという経験が、4年の間に私の殻を破り、一回り大きくしてくれたと思います。皆さんも海と六甲山に囲まれるキャンパスで、「あそぶんがくぶ一回生」として大学生活を始めてみませんか？

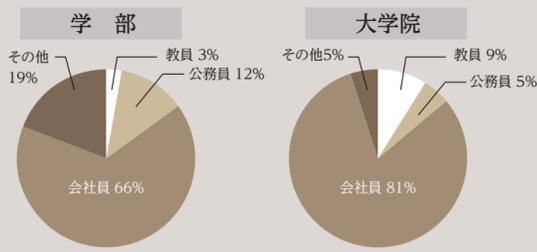
各業界での活躍

公務員、民間企業への就職、大学院への進学など、優れた進路実績があります。

●過去三年間の就職率と進学率

学部		大学院	
【進学率】	【就職率】	【進学率】	【就職率】
14.0%	平成30年 79.3%	27.7%	平成30年 57.4%
14.7%	令和元年 81.0%	35.0%	令和元年 50.0%
15.6%	令和2年 69.2%	14.9%	令和2年 46.8%

●就職先の割合



●主な就職先の名称

学部	ゆうちょ銀行、三菱UFJ信託銀行、大和証券グループ、積水ハウス不動産関西、近鉄不動産、阪急交通社、住友商事、厚生労働省、兵庫県教育委員会、事務局、京都府庁、神戸市役所、京都市役所、日本航空、私立金蘭千里中学校、高等学校、熊本放送、伊藤忠ファッションシステム、NTT西日本、日本コプ共済生活協同組合連合会、関西電力、ダスキン
大学院前期課程	日本郵便、越谷市役所、私立淳心学院中学校高等学校、富士通、国際交流サービス協会、大和ハウス工業、ビジネス・アソシエーツ、弥栄自動車、京都府立高等学校教員
大学院後期課程	三井不動産レジデンシャル、私立東洋大学付属姫路中学校高等学校

文学部生になったら — 在学生・卒業生に聞く —



萩原 佑悟
(Hagihara Yugo 4年生)
大阪教育大学附属高校
天王寺校舎卒業
(この文章は、2年生時のものです)

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1	科学史 A	数学 B	西洋史演習	東洋史	
2	神戸大学史 A	阪神淡路大震災 A	ものづくりと科学技術 A	西洋史	社会学概論
3	東洋史	西洋美術史		ロシア語	西洋史演習
4	英語	西洋史演習			
5					

2年生の前期では基本的に教養科目はまだ残っています。ただ言語の授業数が1年に比べて減るので、その分文学部での専門科目の授業が増えました。僕は西洋史専修なので専門科目は歴史系の授業がメインになっています。教養科目は必要な分とって、それと言語以外のコマに専門科目を入れている感じです。

ある1日の過ごし方

7:30	起床。授業が1限からある日の朝は早いです。高校生活の名残があった1年の序盤の頃は楽勝でしたが、段々しんどくなってきました。非下宿勢の朝はもっと早いらしいです。	神戸文学部の1学年の定員は100人程度と小規模なので、その中でいくつかの仲良しグループが別個に形成されたとしても、メンバーの中には他のグループにも友達がいったり知人がいたりすることが多いです。それが連なって全体がうっすら繋がっているのが文学部の人間関係の特徴だと思います。なので交友関係の範囲が限定され過ぎないのがこの学部の良いところの1つだと思います。あと個人的には文学部校舎が標高の低い所にあることを推しておきたいです。六甲台キャンパスへの登下校はどう頑張っても登山になってしまうので、少しでも山の麓にあるのはありがたいです。
8:50	1限 東洋史。この授業では主にイスラム文化の歴史を学んでいます。予習で授業で扱う洋書を自分で訳して要点を絞り、授業中に先生と一緒に内容を詳しくとっていき流れます。	勉強面で特徴的なのはやはり専修という制度です。1年まではなんだかんだで浅く広い学習を求められましたが、2年からは専修に所属して専門的な学習が始まります。僕は入学する前から志望専修は決めていましたが、1年の間に各専修の入門的な授業を受けて、その上で決めた人も多いようです。神戸文学部にも結構たくさん専修があって、文系の人ならどれか1つぐらいは興味のある分野の専修もあると思います。なので、勉強したい分野が決まっている人はもちろんそれを突き詰められるし、そこまで定まっていなかった人でも探せば見つけられるような環境が整っているのが文学部の良いところだと思います。
10:40	2限 西洋史。こちらは講義形式です。主に古典期アテナイの裁判について学びます。この授業は他学部から来ている生徒も多いようです。	
12:10	昼休み。教養や言語の授業が行われる校舎と文学部校舎は少し離れている(徒歩10分超)ので、この間に昼食と移動を済ませます。	
13:20	3限 ロシア語。2年の前期までは英語含め言語の授業は残っています。内容的には1年に続くぐらいのレベルです。	
14:50	放課後。学校に残ったり家に帰って翌日の予習をします。下宿なので、買い物や家事に時間をとられることもあります。残りは気ままなフリータイムです。	
2:00	就寝。翌日は2限スタートで余裕があるので夜更かししがちです。そそでいたい翌朝後悔します。	



松尾 弥悠
(MATSUO Miyu 3年生)
立命館高等学校卒業
(この文章は、1年生時のものです)

1週間の時間割

	月	火	水	木	金
1			English Communication		初年次セミナー
2	English Literacy		健康・スポーツ科学実習		知識システム入門
3	哲学入門	社会文化入門	情報基礎	史学入門	
4	文学入門	中国語初級		中国語初級	
5					

1年生には、文学部での学びがどのようなものかという授業が多く開講されています。大学生になると、自分で授業を組むなど高校生に比べて自由度が高く、自分で考えて行動する機会が増えるので大変ではありますが楽しいです。

ある1日の過ごし方

8:00	2限からの日はゆっくり起床。朝食後、掃除や課題をしたりして時間を潰します。	文学部と一口に言ってもその中には様々な分野が含まれています。神戸大学文学部では、1年生のために各専修について知る授業が開講されており、自分が今まであまり知らなかった分野に触れることができます。私も実際授業を受けて、この学部を受験しようと思ったときには考えてもみなかった分野に興味がありました。入学してすぐに専修を決める必要が無く、自分の興味の幅を広げて悩める時間がたっぷりあるというのは、神戸大学文学部の大きなメリットの1つだと思います。また、文学部は留学支援なども充実しています。期間や行き先の種類も豊富で、自分の目的に合わせて計画を立てられます。1年生でも参加できる海外研修もありますし、海外からの留学生もたくさんいて外国の方と関わる機会が一気に増えるので、留学に興味のある学生にとって最高の環境です。文学部は他の学部比べて人数が少ないのですが、その分一人一人に対するサポートが手厚く、学生の相談にも丁寧に対応してくれます。同級生や先輩も優しく、アットホームな雰囲気がこの学部の魅力です。
10:00	徒歩で学校へ向かいます。	大学は授業でもそれ以外でもそれまでにしたことのない体験をすることができ、たくさんの刺激を貰えます。高校までの常識が簡単に覆ることもあります。やりたいことが決まっている人は新しい環境で視野を広げることができ、やりたいことを探したいという人にとっても神戸大学文学部はぴったりの場所です。
10:40	2限は必修の英語の授業。長文を読んだりライティングをしたりします。課題が多めなのでちょっと大変。	
12:10	友達と一緒に昼食を取ります。授業が終わってすぐは食堂が混むので少し時間をずらして利用したり、天気がよければお弁当を買って外で食べることもあります。	
13:20	3限の哲学入門。哲学とは何かということや、様々な時代の哲学者について学びます。	
15:10	4限の文学入門。オムニバス形式の授業で様々な国の文学作品を読みます。	
16:40	下校。スーパーに寄って買い物をしてから帰ります。	
17:30	帰宅して夕食を作ります。夕食後は課題をしたり動画を見てまったり過ごします。	
23:00	就寝。	

入学から卒業まで

① 専修の決定 — 「よく考えて自分の専門を決めることができる」

文学部には、哲学、文学、史学、社会学、知識システム、社会文化という5講座に15の専修があります。1年次の11月末頃に専修を決め、2年生からそれぞれの専修に所属することになります。自分は文学部でなにを研究したいのか、じっくり考えてから選ぶことができます。そのために、各講座ごとのガイダンスとも言える「入門」、人文学への導入をはかる「人文学導入演習」、そして各専修での研究の基礎を身につける「人文学基礎」など、学生の興味・関心に応じて選択できるよう、いくつかの内容に分けて1年生向けの授業が複数開講されています。これらを参考に、自分が進む専門を決定します。

② 文学部の授業科目 — 「四年一貫で学ぶ人文学の多様な広がり」

文学部の学生が4年間に学ぶ授業科目は、全学共通授業科目と文学部の専門科目とに分けることができます。全学共通授業科目は、教養科目、外国語科目、健康・スポーツ科学などで構成されています。文学部の専門科目は、基礎科目、自由選択科目、卒業論文関連科目、卒業論文からなります。下の図に履修に関する学年ごとの大まかな流れを示します。

1年	2年	3年	4年
基礎教養科目 総合教養科目	基礎教養科目 総合教養科目	高度教養科目	高度教養科目
外国語科目	外国語科目		専門科目
健康・スポーツ科学		専門科目	
専門科目 (基礎科目)	専門科目		卒業論文

●**教養科目** 教養科目には、原則として1・2年次に履修する基礎教養科目と総合教養科目、3・4年次に履修する高度教養科目があります。人文科学だけでなく社会科学や自然科学についても幅広く現代の教養として身につけ、他分野にまたがる課題を考え協働して解決する力を養います。文学部で人文学の研究を進める上でも、しっかりと学んでおくことが必要です。

●**外国語科目** 外国語科目は、「外国語I」として英語を、「外国語II」として、ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語のなかからひとつを選び、合わせて2か国語を学びます。文学部ではこの他に、韓国語、イタリア語、西洋古典語(古代ギリシア語とラテン語)の授業も開講されていますが、専門次第で学生はさまざまな言語を独学します。人文学を学ぶ者にとって外国語の習得は必要不可欠です。

●**基礎科目** 基礎科目は、人文学の基礎を学び、専門科目での学修を豊かなものにするための準備を行なう科目です。専修決定後は、それぞれの専門を深く研究することになりますが、教養科目や基礎科目は、そのための礎石であり、自分の専門研究に広がりを与えてくれるものです。基礎科目には、各講座の入門、人文学導入演習、人文学基礎などがあります。また、大学生として自立的な学びを促すため、初年次セミナーが用意されています。

●**専門科目** 専門科目は、専門的な講義、演習、実習などからなります。単位制度に基づく大学の授業は、必修科目と選択科目の取得単位数がそれぞれ決められています。必修科目は必ず履修しなければなりません。選択科目は一定の範囲内から自由に選択できますが、それらは講座ごとに細かく指定されていますので、注意が必要です。また、ひとつひとつの授業の学習を徹底するために、1年間で履修登録できる単位数には上限が定められています。したがって、履修にあたっては、入学後に配布される学生便覧やガイダンスでの説明に従い、各学期の始めに、どの授業を取りたいか、受けなければならぬかを十分に考えて、計画的に登録してください。

③ 講義と演習 — 「徹底した少人数教育と課題探究能力の開発」

文学部で高い割合を占める授業科目が、特定のテーマを探究する「特殊講義」と、数人から十数人で行う「演習」、いわゆるゼミです。実験やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で行われます。中でも、文献や資料を講読したり、自分で選んだテーマについて研究報告を行い、受講者で議論を戦わせた「演習」は、専門分野の研究手法や考え方を習得し、自ら課題を発見して解決する能力を鍛えるうえで大変重要です。

④ 卒業論文

卒業論文は、文学部4年間の学習と研究の結晶です。自分で研究テーマを決め、指導を受けながら、論文作成のための調査や分析も自力で行ないます。これまでに挙げた授業科目から必要な単位数を取得した上で、原則として20,000字(400字詰め原稿用紙で50枚)程度の卒業論文を作成し、口述試験(口頭試問)に合格すれば、卒業となります。